

パスカルの《アポロジー》の プラン復元に関して (XXV)

竹 下 春 日

25°《ラビの教え》

この章は、La. 536-Br. 635 および La. 537-Br. 446 の二断章のみを含んでいる。La. 536は、《ラビ教説の年代記。／（ページ数を示したのは『プギオ』〔プギオ・フィデイの略称〕の書による）……》という書き出しで始まり、ハカドシュ、オサイア・ラバ、アセの三人のラビによる著書や注解について、記している。ブランシュヴィックの注釈によれば、『プギオ』とは、十三世紀のドミニコ会修道士レーモン・マルタンの著作『不信仰者特にユダヤ人の不実にとどめを刺すキリスト者の短剣』（略称『プギオ・フィデイ（信仰の短剣）』）のことであるが、この書は1651年ローデーヴの司教ボスケによって復刊された。このためパスカルは、同時代の書と考えていたが、同書は内容上三部に分れる。而してその第3部は、1°三位一体。2°原罪。3°贖罪。に細分されている（以上 M. L. Brunschvicg, *Blaise Pascal, Pensées et opuscules*, p. 537 (note 2) — p. 538 (note) に拠る）。

まづ La. 537について言えば、この fr. の文頭は、次の如くである——《原罪について。ユダヤ人による原罪の十全な伝承。》これはブランシュヴィックの註するごとく、『プギオ・フィデイ』の第3部の2°原罪によるものであり、パスカルの意図は、新約中のイエス・キリストの贖罪の前提たる原罪が既に旧約中に確認されることを論拠として、新約・旧約両聖書の内容的連関を、即ち旧約は新約（メシアとしてのイエス・キリストの来臨）を予定したもので

あるということ、裏附けることにあったと、見られる。言い換えれば、この断章の内容は、直前の章(24°)中の La. 508-Br. 642 ([IX] 中に引用)における、預言の二重の意味の証明方法たる「2°ラビたちによる証明。」、*4°ラビたち自身が聖書に与える神秘的解釈による証明。」、5°ラビたちの根本原理による証明。」の全部または一部に関係あることは、明らかである。*

本章中の La. 537-Br. 446の末尾には(『第一写本』によれば)、*「ラビたちの原理。二人のメシア」*なる語句が附加されているが、*「ラビたちの原理」Principes des Rabbins* は、まさに上出の*「5°ラビたちの原理による証明」Preuves par les principes des rabbins* と明白な一致を示すものであり、本章中の他の一つの断章 La. 536-Br. 635も、上掲の三個の証明方法と関係するものであって、La. 537の如き論述を展開するための一種の見取図である、と、言うことが可能である。即ちパスカルが刊行を予定していた*「アポロジ」*の著作との関連から言えば、この著作の下書を書くための下準備を為すものであって、謂わば下書の下書であり、1°*「順序」*の章中における既分類断章群(Classé)と同じ役割ないし意義を有するものと、見做しうるのである。

26°*「特別の表徴」*

この章も、La. 665-Br. 652 と La. 666-Br. 623 とから成り、象徴的意味において特に重要な意義を持った歴史的・事件・事物を、掲げている。(一) La. 665は、*「特殊な表徴。／二つの律法、二つの律法の板、二つの神殿、二つの捕囚。」* というものであるが、*「二つの律法」double loi* とは、La. 556-Br. 618中の*「彼らの律法は二重の意味を持っている。」*に照応するもので、ユダヤの律法(モーセの十戒)と*「メシアの律法」*(La. 550-Br. 617)とを指している。而して*「メシアの律法」*とは、『マタイ福音書』22章35—40節及び『マルコ福音書』12章28節におけるイエスの言葉——*「『なんじ心を尽し、精神を尽し、思を尽して主なる汝の神を愛すべし』これは大にして第一の誠命なり。第二もまた之にひとし『おのれの如く、なんじの隣を愛すべし』」*(マタイ伝)を、意味することは、言うまでもない。

(二) 《二つの律法の板》*doubles tables de la loi* は、モーセの十戒が二個の石の板に記されたことに由来すると思われるが、パスカルは La. 553-Br. 631 中で、次のことを記している——《神はみずからのすべての言葉が永久に保存されることを望み、またその書物が彼らに対していつまでも証しとして役立つために、契約の箱に〔納め〕られることを望んでおられる、……》この引用文中の《永久に保存される》*soient conservées éternellement* ということは、明らかにモーセの時代以後イエス・キリスト来臨以降いつまでもの意であるから、《その書物》*son livre* とは旧約聖書であり、そうしてこの旧約聖書が新約聖書を象徴するのでなければならない。即ち《二つの律法の板》とは、一方においてはモーセの十戒を記した二個の板を、他方においては両聖書を意味するものに外ならないのである（原語の複数形に注意）。

(三) 《二つの神殿》*double temple* について。——これはエルサレムにおける神殿を指している。La. 652-Br. 715中には、《栄光ある第二の神殿。イエス・キリストはそこに来られるであろう。》と見え、La. 615-Br. 730には、次の叙述が見出される——《彼〔イエス・キリスト〕はユダヤ人と異邦人との王となるであろう。しかるに、このユダヤ人と異邦人との王は双方からはずかしめられ、死をたくらまれるけれども、双方の支配者である彼は、モーセの祭儀を、その中心であるエルサレムにおいて破壊し、そこに彼の最初の教会を建てる。……》この断章中の《モーセの祭儀を、その中心であるエルサレムにおいて破壊し、……》という言葉は、有名なイエスの「宮清め」を指すと考えられるので、La. 652中の《栄光ある第二の神殿》*le deuxième temple glorieux* とは、「宮清め」後のエルサレムの神殿を意味することになり、《彼の最初の教会》*sa première Eglise* とパスカルが呼んでいるものと、同一物でなければならない。したがってイエスの「宮清め」以前のエルサレムの神殿こそが、《第一の神殿》と呼ばれるべきものであり、イエスにとっては、《破壊》さるべき宗教的対象物であったことになる。この理由は、La. 615の最初の部分に徴して明らかである——《……そのとき偶然崇拜はくつがえされるであろう。このメシアはあらゆる偶像を打ち倒し、人々を真の神の礼拝に引き入れるであ

ろう。》つまりイエス在世の当時、エルサレムの神殿における祭儀は、既に《偶像崇拜》*idolâtrie* の傾向に墮していたことが、分るのである。かくしてパスカルの所謂《double temple》とは、イエスの「宮清め」の前後におけるエルサレムの神殿（建造物としては同一であるが、宗教的意義においては全く対立的なる）を、象徴的に解したものと、言えよう。

(四) 《二つの捕囚》*double capacité*。——この語の解釈の手掛りとなるのは、次の二断章（28°章所属）である——《次のような事実を見るのは驚くべきことであり、特別な注意に値することである。すなわち、このユダヤ民族がすでに長い年月のあいだ、しかも常に悲惨な状態で存続しているということ、イエス・キリストの証拠として必要なので、彼らはイエス・キリストを証明するために存続するとともに、彼を十字架にかけたために悲惨であるということ、そして悲惨であることと存続することとは相反しているのに、彼らはその悲惨にもかかわらず、常に存続しているということ。》(La. 588-Br. 640)、《ネブカデネザルがユダヤ民族を連れ去ったとき、王権がユダから除かれたと人々が思うのを恐れて、彼らの捕われの日の短いことと、再び連れもどされるであろうことが、あらかじめ告げられたのである。彼らはいつも預言者たちに慰められ、彼らの王室はつづいた。／しかし第二の破滅は、回復の約束もなく、預言者もなく、王もなく、慰めもなく、希望もないものである。それは王権が永久に取り去られたからである。》(La. 591-Br. 639) この後者の断章（最初の部分）に徴して、《二つの捕囚》の第一の捕囚が、ネブカデネザルによるユダヤ民族の捕囚、史上有名なるバビロンの捕囚であることは、疑いを入れない。それでは、第二の捕囚とは、何を意味しているであろうか。それは、この断章中の《第二の破滅》*la seconde destruction* を、指すものとおもわれる。ユダヤ民族のこの《破滅》の状態は、fr. 中の最後の部分に記された如くであるが、その理由は何んでであろうか。われわれはこの理由を、前者の断章（La. 588）中に見出すことが出来る——《……彼ら〔ユダヤ民族〕はイエス・キリストを証明するために存続するとともに、彼を十字架にかけたために悲惨であるということ、……。》かようにして第二の捕囚とは、イエス・キリスト処刑後のユ

ダヤ民族の恒久的悲惨を、意味しておるのである。以上により、われわれは《double capacité》の意義を、明らかに理解しうるのである。

(五) La. 666-Br. 623について。——この断章番号の指示する叙述内容は、《ヨセフはその両腕を交差して、弟をとりたてる。》という短いものである（ヨセフはヤコブの誤り）。この叙述は、『創世記』48章12—19節に由来するものであるが、パスカルは fr. 646-Br. 711 (299) (27°章中のもの) にあっても、次のごとく書いている——《……そしてヨセフがヤコブの前に自分の二人の子エフライムとマナセとを連れてきて、兄のマナセを右側に、弟のエフライムを左側においたのを祝福するにあたり、ヤコブは両腕を交差し、右手をエフライムの頭の上に、左手をマナセの上におき、そのようにして二人を祝福した。それに対して、ヨセフが、父上は弟をひいきなさるのですかと言って抗議すると、ヤコブは恐ろしいけんまくで答えた、「私はよく知っている、わが子よ、私はよく知っている。けれども、エフライムはマナセよりも大いなるものとなるであろう」と。これは、実際、その結果において真実となった。この一民族は非常に繁栄し、二つの血統を合わせると一国をなすほどになった……》。この引用文によると、われわれはヤコブがユダヤ民族の慣習に反し、弟を兄より優遇した理由として、弟（エフライム）の子孫たちがこの民族の繁栄に貢献する旨を、ヨセフに告げたことを知りうるが、このヤコブの言葉は本質上一種の《預言》であると、パスカルは解釈したものと考えられる。この言葉と、《両腕を交差し》たという行為とは、ユダヤ民族の繁栄とイエス・キリストの宗教の発展とを、象徴的に預言したものであるというのが、この断章（La. 666）の主旨であると、推察される、即ち《ヨセフ [ヤコブの誤り] は両腕を交差して》 Joseph croise ses bras は、イエス・キリストの十字架を象徴的に暗示するものであり、茲にわれわれは、パスカル自身の極めてユニークな解釈に接するのである。したがって章名の《特別の表徴》Figures particulières における《特別の》なる形容詞は、ラビたちを含めて普通の聖書解釈者の解釈を超えたものという意義を、そのうちに内含しておると、推定しえよう。要するに、以上においてパスカルは、旧約・新約の両者に通用する諸象徴のうち、

重要な意義を持った相似的同形的なるものを、本章において集約したものと、言いうるのである。

27°〈預 言〉

〔Ⅰ〕 預言の特性。——(一) 預言の意味と、その理解のための内面的条件。——La. 619-Br. 732 (『エレミア書』31章34節, 『ヨエル書』2章28節, 『エレミア書』32章40節), La. 660-Br. 698 (213)。この二断章のうち, La. 619中の, パスカルによって聖書より引用された章句(カッコ内のもの)は, 分類項目(預言の特性)の内容に相当するものを表現している〔以下同様〕が, パスカルはさらに同断章中において, 次のごとき要旨を附加している——〈預言するとは, 神について語ることであり, しかも外的証拠によらず, 内的なじかの直観によって語ることである。〉(La. 619)と。

(二) 預言の真実性とその証拠。——La. 617-Br. 694, La. 630-Br. 738。後者の断章は, 次の如くである——〈預言はメシアの来臨に際してすべて起こるべきさまざまのしるしを告知したので, それらのしるしはみな同時に起こらなければならなかった。そのときメシアは来るはずであったが, イエス・キリストはそのとき来て, 自分をメシアだと言われた。すべてこれらのことも難なく行なわれた。これは預言が真実であることを十分示している。〉

(三) 預言の表現法。——パスカルは, 断章 La. 627-Br. 709で, 〈同一のことを多くの仕方で預言するには, 大胆でなければならない。〉旨を述べ, また聖書の預言が, 〈やがて起こるべきことを明らかに預言し, 人々を盲目にするとともに開眼するという意図を公言し, やがて起こるべき明白な事柄のあいだに漠然としたものを混ぜた〉(La. 635-Br. 756)ことを, 称讃している。さらに預言の表現の仕方にかんし, パスカルは次の事をも説いている——〈預言のうちに, 特殊な事柄に関するものと, メシアに関するものとが混じっているのは, メシアに関する預言が証拠を欠くことのないためであり, 特殊な預言が実を結ばないことのないためである。〉(La. 659-Br. 712 (312))。

〔Ⅱ〕 預言と神の業。——(一) 預言が神によることの証拠。——La. 620-

Br. 734 (『ダニエル書』 2章34節), La. 625-Br. 716 (『イザヤ書』 48章5節), La. 636-Br. 727 (『イザヤ書』 49章6節), La. 664-Br. 713 (317)(『イザヤ書』 41章・42章・43章・45章4節および21節・46章・48章節)。これらのうち代表的な La. 620を掲げると、次のごとくである——《……イエス・キリストは、はじめは小さいが、のちには大きくなるであろう。ダニエルの小さい石。／たとい私がメシアについて語られている何ごとも聞かなかったとしても、世界の行程についてかくも驚くべき預言があり、しかもそれが成就したのを見ては、それを神のわざであるとおもうであろう。またこれらの同じ書物が一人のメシアを預言していると知ったならば、彼が来ることを確信するにちがいない。そして、これらの書物が彼の来臨の時を、第二の神殿の破壊以前においていると知ったならば、彼はすでに来たと、私は言明するであろう。》

(二) 神が預言を行う理由。——(a) 預言が世界中に拡がってゆくようにする為め (La. 626-Br. 706)。(b) 預言が神に由来することを証明するため、及び預言に対する疑いの余地が無いようにする為め (La. 461-Br. 576 (218))。(c) 不信仰者を遠去けるようにする為め (La. 658-Br. 568 (311))。

(三) 預言が神に由来するものであることの傍証。——かかる傍証として、パスカルは神の摂理による歴史的事件と歴史的経過とに就いて、少からず筆を費している。(a) バビロンの捕囚 (La. 633-Br. 637)。(b) 異教の神々の没落を象徴する伝承——《偉大なるパンは死んだ。》 (La. 634-Br. 695)。

(c) 天地創造と大洪水、およびモーセの律法の成立と、預言の成就 (La. 461-Br. 576 (218))。(d) イエス・キリストの宗教に反対する人々の動きと、この動きに反抗してこれを屈服させた平凡な人々の動き (La. 642-Br. 783 (295))。

(本章未完——XXV 回了)